

解題 特集について

星名宏修

本特集は、二〇一一年度に言語社会研究科の教育研究プロジェクトとして採択され、助成を受けた企画の報告である。その前年にサブプロジェクトとして採用されてから、平均して二ヶ月に一回の割合で研究会を開催してきた。言社研のメンバーだけでなく他大学の台湾文学研究者にも声をかけ、植民地における大衆文化に焦点を当て、議論を積み重ねてきた。

日本「内地」では、一九二〇年代に、とりわけ二三年の関東大震災の復興のなかで「大衆」が登場したといわれることが多い。「大衆文学」誕生の指標としてしばしば言及される江戸川乱歩の「二銭銅貨」は、一九二三年の『新青年』に掲載されたものだ。だが、そのような意味での「大衆文学」は、同時代の台湾で存在しえたのだろうか。植民者の言語が「国語」として教育される場において、「読者大衆」とはどのような存在だったのか。そうした「大衆」がもしいるとすれば、それは文化にどのような変容をもたらしたのだろうか。私たちの研究会は、こうした問題意識から始まった。

二〇一二年二月一八日に、日本大学の三澤真美恵さんが研究代表者をつとめる科学研究費補助金（C）「東アジア植民地期映画フィルム史料の多角的研究モデル構築」との共催で、台湾から五名の研究者を迎えシンポジウムを開催した。ここに収録された論文はその時の議論をもとにしている。